opusdei.org

若者たちの質問への 教皇からの5つの答

2006年4月6日に行われたローマ・ラッチオの若者との集まにおいて、現代の若者に聖書は何を語るのか、愛するとはが立しているのか、科学と信のは若者たちの問いに教皇聖下は直接答えられた。

2007/02/09

◇教皇様、私は聖バルトロマイ教会 に属するシメオーネです。21歳で、 ローマのラ・サピエンツァ大学で化 学工学を学んでいます。

まず、《人間生活の歩みを照らす神 の言葉》というテーマで行われる第 21回ワールド・ユース・デーにメッ セージをお寄せくださったことに感 謝します。心配ごとや未来への不安 を前にする時、あるいは単に日常生 活の中で、自分の疑問への答を見つ けるために、神のことばに養われ、 キリストをよりよく知る必要性を感 じています。イエスが自分の具体的 状況にいればどのように振る舞うか としばしば自分自身に問い掛けます が、聖書が私に語ることをいつも理 解できるわけではありません。さら に、聖書は多種多様な人々によっ て、様々な時代に渡って書かれたと 知っていますが、いずれも自分から は遠い出来事です。どうすれば今読 む神のことばが私の人生に問い掛け ているのだと知ることができるので しょうか。

◆まず第一の点について触れながら 答えましょう。最初に述べるべき点 は、聖書は単なる歴史的な書物とし て 一たとえばホメロスやオビディウ スやホラシウスのように一読むべき ではないということです。まことに 神のことばとして読む、すなわち、 神と対話しながら読むべきなので す。初めに祈り、「私に扉を開いて ください」と主に話し掛けなければ なりません。聖アウグスチヌスは説 教の中でたびたびそう述べました。 「主が私に何を言われたいのかを見 つけるために、みことばの扉をたた きました。」これが重要なことだと 私は考えます。聖書は学術的に読む のではなく、祈りつつ、「このペー ジによって私に伝えたいあなたのこ とばを理解できるよう助けてくださ い」と主に申し上げるのです。

第二の点は、聖書は神の家族との交わりに導いてくれるということです。ですから、聖書を利己的に読む

ことはできません。もちろん、神と の個人的な対話のうちに聖書を一人 で読むことは大切なことですが、同 時に私たちと共に歩む人たちとの交 わりのうちに読むことも大切なので す。《神的に読む》著名な師の助け に委ねることが必要です。たとえ ば、まことに《神的に読む》人であ るマルティーニ枢機卿の多くの著作 は、聖書の意味に分け入るための助 けとなります。歴史的背景と過去の 特徴的な要素とを熟知している彼 は、一見したところ古いことばが、 いかに現代的な意味を持っているか を説明しようとしています。このよ うな師の助けによって、私たちは もっと理解することができ、聖書を どのように読むべきかを学ぶので す。また一般的には、共に歩む友人 たち、どのようにキリストと共に生 きるのか、神のことばからどのよう ないのちが私たちの人生にもたらさ れるのかを探している友人たちと一 緒に読むことが勧められます。

第三の点は、もし聖書を師の助けの もと、道を同じくする友人たちと共 に読むことが大切であるならば、旅 する神の民である教会と密接に結ば れながら読むことが特別に重要だと いうことです。聖書は二つの主体を 持ちます。まずは語りたもう神。し かし、その神は人をそのみことばに 巻き込もうと望まれました。イスラ ム教徒がコーランは神が口ずから現 したものであると確信しているのに 対して、聖書の特徴は《相乗的》、 つまり神と人との協力関係にあると 私たちは信じているのです。神は第 一の主体としてその民にことばを もって関わられ、人は第二の主体と してあります。聖書記者たちが存在 しますが、神のことばによって歩み つつ神との対話を続ける神の民とい う、永続する主体との継続性がある のです。神に耳を傾けることを通し て、神のことばを聞くことを学び、 さらにそれを解釈していくこと。こ うして神のことばが現在化するので

す。なぜなら、人間は死んでいくも のですが、神の民という生きた主体 は、常に生き、千年期を越えて存在 するもの。神のことばを内面に生か す、いつも変わらぬ主体なのです。

このように考えると、聖書の様々な 構成が理解できます。ことに《再 読》と呼ばれるもの。あるテキスト がたとえば100年後に別のテキスト において読まれる時に、すでに最初 のテキストに含まれていたが以前に は理解できなかった点が、完全に分 かるようになることです。さらに は、またその後の別の時代に再読さ れて、みことばの別の次元、新たな 側面が理解されてきました。こうし て、深い継続性の中で再読と再記述 が繰り返され、救い主を待ち望む 間、聖書が展開され続けてきたので す。そして、キリストの到来と使徒 たちの経験によって神のことばは決 定的なものとなり、新たな記述をさ れることはもうないけれども、私た

ちの理解を深めていくことの必要性は続いています。主は仰せられました。「あなた方が今は持つことができない深さに、聖霊が導いてくれるだろう」

このようなことから、教会の交わり が聖書の生きた主体だと言えるので す。しかし、今もまた主なる主体は 神ご自身であり、私たちの手の中に ある聖書を通して話し続けておられ ます。これら三つの点を学ぶべきだ と私は考えています。つまり、主と の個人的な対話のうちに読む。信仰 の経験によって聖書の意味に深く入 り込んだ師たちと共に読む。典礼を 通してそれらの出来事を現在化して くれる教会の大いなる助けによって 読む。この教会を通して主は今私た ちに語りかけており、こうして現在 の私たちに向かって神が話す場であ る聖書の中に、より一層入り込んで いくのです。

◇教皇様、アンナと言います。19歳 で文学部で学んでいて、カルメル山 の聖母教会に属しています。私たち が避けることのできない課題の一つ に、愛情があります。愛することの 難しさをよく感じます。なぜなら、 愛することを利己的なものだと勘違 いしやすいからで、ことに様々なメ ディアが性に関して個人主義的かつ 世俗的な見方を押し付けようとして いる現代においてはそうです。自由 と個人の良心という名のもとではす べてが許されるという風潮です。結 婚に基礎を置く家庭というものは、 教会が発明したもののように考えら れています。結婚前の性交渉を認め ないのは、多くのカトリック信者に とっても、理解できない時代遅れの ように考えられています。愛情生活 において責任ある生き方をしたいと 望んでいる者も数多くいることを視 野に入れて、神のことばはどんなこ とを私たちに述べているのかを説明 してくださいますか。

◆確かに大きな課題であって、僅か な時間では答えることができません が、いくつかのことを申し上げま しょう。愛を利己的なものとして示 すのは誤りだということを、アンナ さんが質問の中ですでに答えを出し ていました。本当の愛とは、自己を 捨てて出会いを求めることです。ま た、彼女が言ったように、消費主義 的の文化は、すべてを手に入れるか のように見せて私たちを空っぽにし てしまう相対主義によって私たちの 生き方を偽物にしています。しかし ながら、その時私たちは神のことば を耳にします。確かにアンナさんが 言うように私たちは神のことばが何 を述べているかを知りたいと望みま す。

聖書の最初のページに、人間の創造について話されたすぐ後、愛と結婚の定義を見いだすことができるのは、とても素晴らしいことだと私には思えます。聖書はこう述べます。

中世の神学者たちは、聖書の最初の 部分に書かれたこの点をとらえ、人 類史が始まる以前の歴史の最初にたる 創造の時に定められたゆえに、 婚姻は七つの秘跡の最初のものでがる と述べました。天地の創造主離れて めた秘跡であり、男は父母を離れて 女と結ばれ、二人は一体となり在 となるという人間存在となるという に刻まれた方向性を与えるものです。 ですから、婚姻の秘跡は教会が発明したものではありません。人が人として創造されたときに、生き生きとした愛の実りとして生まれたもので、それによって男性と女性が互いに出会い、同時に愛に呼ばれた創造主とも出会うのです。

確かに、人類は罪を犯して楽園から 追放されました。現代的な言い方を するならば、すべての文化は人類の 罪と過ちによって汚されており、私 たちの本性に刻まれた初めの計画は 見えにくいものとなりました。実 際、文化の中に神のこの最初の計画 のかげりが見られます。しかしなが ら、同時に、人類の文化の歴史を振 り返ると、人間はその存在の深みに 刻まれた神のこの計画を完全に忘れ 去ることがなかったことも明らかで す。男女の間の結婚以外の関係は、 存在としての人間が置かれた最初の 計画と整合性がないと、実際は考え られてきました。このようにして、

文化、ことに中心的な文化においては、男女がひとつのからだとなるという一夫一妻制という現実に向けられてきました。このような忠実のもとに、新たな世代が誕生し、文化の伝統を継承し、その継続性のうちにまことの進歩を実現していくことができるのです。

この点についてイスラエルの預言者 たちの声に触れて語られた主は、 モーセが与えた許可についてこう言 われました。「あなたたちの心が頑 固なので、モーセは許した。|原罪 の後、心は頑固になりましたが、そ れは創造主のもともとの計画ではあ りませんでしたから、他の預言者た ちは徐々にはっきりとした形で、最 初の形を強調してきました。人類を 新たにするため、一夫一妻制に明ら かに導くためにそれらの預言者たち を使われた神は、エゼキエルの口を 借りて、私たちがこのような呼びか けに応えるためには、石の心ではな

く、肉の心、すなわちまことに人間 的な心を持たねばならないと述べら れたのです。

洗礼を受けることによって、信仰の うちに、神は私たちにこの新しい心 を《移植》されます。物理的な移植 ではありませんが、このたとえを通 してこう言えるでしょう。移植を 行った後の臓器は処置が必要であ り、《他人の心臓》としてではなく 《自分の心臓》として活動するため に、新しい心臓のために必要な薬を 飲まなければなりません。霊的な 《移植》によって神は、創造主と神 の召し出しに向かって開かれた新し い心をもって生きることができるよ うにしてくださいます。その新しい 心が本当に《私たちの心》となるた めには、的確な処置、適切な薬に頼 る必要があります。キリストと教会 との交わりに生きることによって、 新しい心は《私たちの心》となり、 結婚が可能になります。たとえ現代

社会において困難に見えたり、不可能に思えたりするとしても、創造主が計画されたように、ひとりの男とひとりの女が排他的に愛しあい、一致した生活をすることは可能なのです。

神は私たちに新しい心を与えてくだ さいますから、《私たち》のものと なるためにふさわしい処置を受けな がら、その新しい心で生きていかな ければなりません。このようにして 創造主が与えられた形で生きること になり、本当に幸せな生活が生み出 されます。実際、他の多くの形が見 られる現代においても、創造主に よって示された人生と愛に忠実さと 喜びをもって生きている多くのキリ スト者の家庭を見ることができま す。このようにして、新たな人類が 広がっていくのです。

最後に付け加えたいのは、スポーツ にしろ仕事にしろ、目標に達するた めには規律と自己犠牲が必要であるけれども、それこそが成功に可耐力のである目標へのである目標へのであるとであるとであるとでであるといても同じとないではいます。こくは、はないで生きるというな、それとなったとに人間的で生きるための助けなのであるというない。

創造主の計画に沿って生きることを 邪魔立てしようとする消費主義的文 化が存在するという事実を前にし て、カトリック文化の島、オアシス を作り上げていく勇気をもつ必要が あります。やがて、それは広大にな り、そこで創造主の計画に沿って 人々が生きるようになります。

◇教皇様、私はイネリダといって17 歳です。バルバリアの聖グレゴリオ 教会でガール・スカウトの手伝いをし ていて、マリオ・マファイ校で学ん でいます。

第21回ワールド・ユース・デーへの メッセージの中で、教皇様は「キリ ストのことばに根ざした使徒たちの 新たな世代が立ち上がることが緊急 課題です」と言われましたが、それ はとても強いことばであると同時に 献身を求めるものであって、怖ささ え感じるものです。確かに私たち自 身も新しい使徒になりたいと思いま すが、現代が突きつける挑戦状とは 何を指しているかを、もう少し具体 的に説明していただけるでしょう か。また、新しい使徒たちはどのよ うな者であるべきかについて、教皇 様はどのような夢を抱いておられる のですか。言い換えれば、私たちに 何を期待しておられるのでしょう か。

◆私たちは皆、主は私たちに何を期待しておられるのかと自問します。

現代の大いなる挑戦状 一バチカンへ の定期訪問をする様々な国の司教 団、たとえばアフリカの司教たちも 同じことを言っていましたが一、そ れは世俗主義、つまり世界には《神 など存在していない》と思わせるよ うな生き方のことです。神を個人的 世界の内側に閉じ込め、客観的な対 象としてではなく、ただの感情にし てしまいます。その結果、各自が自 分勝手な人生を思い描くことになり ます。あたかも科学的であるかのよ うに示されるこの見方は、実験に よって証明できることのみを価値あ るものと見なします。したがって、 直接に実験で証明できない神に対し て、各自は自分の計画だけを見て、 ひいては互いに対立するようになり ます。この見方は社会そのものに害 を与えるのです。このように、実際 は生きることができない状況をもた らします。

神が再び私たちの社会に姿を現すれる。これではなりません。これではなりませんが最初の必要です。するというでは、私たちが最大生をあれたが自立したがあれたちが自立したがあれたちがはないであり、くいのでは、ないでは、ないでは、ないではないではないではないではないではないではないです。とをはっきりさせるのです。

ですから、まず行うべきは神を知り、日毎深く知り、私の人生の人生の中が私を勘定に入れることを知ることを知ることを認め、私自は次ではもなったとを認め、私自は他者との共存になるとの共ち立るとものでは、何を必要とするとものではらいが湧いてくるということで

す。実際、暴力的な姿など、多くの 誤った姿で神は描かれています。そ こから出て来る次なる課題は、私た ちのために苦しみを受け、死に至る まで私たちを愛し、そうすることに よって暴力に打ち勝った方であるイ エスに現れた神を認めることです。

何よりもまず《私たち自身》の人生 の中に、生ける神を現さなければな りません。知られざる神、造られた 神、考え出された神ではなく、ご自 身を、その顔を示された神です。そ のようにして初めて私たちの人生は 本物になり、まことに人間的なもの となるのであり、結果として本当の 人間主義の価値基準が社会において 実現されるのです。この点において も、最初の答で申し上げた通り、私 たちだけでは正しくまっすぐな人生 を築き上げていくのは不可能です。 正しくまっすぐな友人たち、すなわ ち神が存在し、その神と共に歩むこ との美しさを知っている人たちと一

◇教皇様、私はチネチタの聖ヨハネ・ボスコ教会に属するヴィットリオです。20歳で、トル・ベルガータの大学で教育学を学んでいます。

教皇様のメッセージそのものに、神に寛大に応える際、ことに奉献生活や司祭職の道への招きに応える際に恐れを抱かないよう勧めています。恐れるのではなく、決して私たちを裏切らない方に信頼するようにと。ここに集う若者の多くが、あるいは

テレビ中継を見ている多くの者が、 特別に捧げられた生活によってと確うことを考えているとをでいるの道が正しいますが、どの道が正とで追がないますがは簡単なことにはあてません。教皇様はどのようではしてから道を見つけられたのでばれてではないがでするためにまな助言をくださいますか。

しかしながら、まさにあの非人間的でひどい社会制度の中でその《強い声》を聞くにしたがって、逆に司祭の必要性が大いにあることを理解しました。非人間的文化を前にしてるもに正しい道を示してくれるものです。 ない、私たちはこの道を行きぬく努力をする必要があると考えたのです。

このような状況の中、司祭職への召 し出しは私の中で自然に、大きな出 来事もなく、育っていきました。さ らに、この道は私を二つの点で助け てくれました。両親と主任司祭のお かげで、若い時から典礼の美しさを 発見することができたこと。そこに 神的な美が現れ、天が開かれるのを 感じることができたからです。二つ 目は、聖書を诵じて神を知ることの 美しさに出会ったことです。そのお かげで、神との対話である神学とい う素晴らしい冒険に足を踏み入れる ことができたからです。神が共にお られ、共に祝われる場である神学と 典礼に入り込むという喜びを得ることができたのです。

もちろん、困難にも出会いました。 生涯に渡って独身生活を生きること ができるのかと自問しました。まだ 実践を伴わない理論的な形成しか受 けていない人間であった私は、良い 司祭になるためには神学を愛するだ けでは足りないことにも気付いてい ました。若者や老人や病人や貧しい 人たちなどのために心を砕く必要が あり、小さな人々のために小さくな らなければならないからです。神学 は美しいものですが、言葉と信仰生 活における単純さもまた必要なこと です。だからこそ、自らに問うてい たのです。一方的な単なる神学者に なることなく、それらすべてを生き 抜くことができるのだろうか。しか し、神ご自身が私を助けてください ました。ことに、良き友、良き司祭 と教師を通して、助けてくださった のです。

質問に戻りましょう。大切なのは私 たちの道の途上で示される主の仕草 に注意しておくことだと思います。 主は、出来事を通して、人々を通し て、出会いを通して私たちに語られ るのですから、そのすべてに注意し ておく必要があるのです。次に、イ エスとの友情関係に入り、個人的な 付き合いを深めることです。他人や 書物を通してイエスは誰かというこ とを知るだけで満足せずに、個人的 で深い友情関係に生きなければなり ません。そうして初めて、主が私た ちに望まれることを発見できるから です。

続いて、自分自身に目を留めて、自分の可能性を見つめる必要があります。一方では勇気と、もう一方では 謙遜。信頼と自分を開くこと。友人 や教会の方々や司祭や家族などの助 けも借りることができるでしょう。 主は私に何をお望みなのだろうか。 確かにそれはいつでも大いなる冒険 です。しかし、その冒険と向かい合 う勇気と、共にいてくださる主が見 捨てることなく助けてくださるとい う信頼があればこそ、実現が可能な のです。

◇教皇様、ジョバンニと言います。 17歳で、ローマのジョバンニ・ジョ ルジ校で学んでおり、慈しみの母な る聖マリア教会に属しています。

聖書の啓示と、真理を探求する科学 的探究における理論とを、どのかを に調和させることができるのかを りよく理解するための助けをもの りよく理解するための助けをと がです。頻繁に、科学と信 は敵対している、科学と技術では もの、数学理論によってすべては 明された、世界は偶然の産物であ る、数学が神の定理を見つけ得ない のは神が存在しないからだ、…と

◆偉大なるガリレオは、神は数学という言葉を使って自然世界という本を書いたと言っていました。彼は神が2冊の本、すなわち聖書と自然世界という二つの本を書いたのである。それゆえ、数学こそが創造主である。それゆえ、数学こそが創造主でのである。と確信していたのです。ここで、数学とは何かを考えてみましょう。数学自身は人間が発明

した抽象的なシステムであった抽象的なシステムであしているで在しているでをです。ですから、いってはいるです。でする知れる知りのでがで扱われる知りである。でするないのでは、実際のでは、実際のでは、実際のでは、実際のでは、実際のでは、実際のでは、実際のでは、実際のでは、実際のでは、実際のでは、大きなができるとができることがない。

とが一致すること自体、私にとっては信じ難いことです。私たちの世世界の発明された数学が、宇宙世界ののアプローチとその利用をはののアプローチとのです。これですのです。では、人間の知識といるといるといます。自然界のおり方とのこの一致にはいることには、自然界のあり方とのこのでは、私たちが考えたとと、自然界のあり方とのこのでは、私たちが考えたとと、自然界のあり方とのこのでは、私たちが考えたとと、自然界のあり方とのこのでは、私たちが考えたとと、

人間が発明したことと、宇宙の構造

そが、ひとつの謎であり挑戦だと私には思えます。なぜなら、究極的には、《ひとつ》の理性が二つの世界を結び付けているのであり、同一の理性を共通の根に持っていなければ、我々の理性はもうひとつの理性を発見することはできないからです。

このような意味で、神そのものを現 すことはできないにしても、数学は 宇宙の知的構造を私たちに示してく れると思います。最近《カオス理 論》ということも言われますが、も しも最初に混沌としたものしかない のであれば、あらゆる技術は不可能 になってしまいます。なぜなら、技 術が信頼できるのは、数学が信頼で きるからだからです。結局のところ 自然界の力によって機能することが 可能な我々の科学というものは、物 質の信頼できる知的な構造を根拠と しているのです。

このように、物質の中に主観的な合 理性と客観的な合理性があり、それ が一致しているのを見ることができ ます。もちろん、自然法則の枠内に おいて実証することはできない以 上、両者が唯一の知性にその起源を 持っていることを証明することは不 可能です。しかしながら、この二つ の知性の背後にあるこの知性の一致 が、私たちの世界を実際に現してい るのだと思います。そして、知性を 使ってこの世に奉仕すればするほ ど、創造の計画が実現されていくの です。

最後に、根本的な問いかけにたどり 着くために、こう言えるでしょう。 神は存在するか、しないかのいずれ かである、と。この二つの可能性し かありません。すべてのものの起源 である創造主たる理性の存在の優位 性 一理性の優位性とは自由の優位性 でもあるのですが一を認めるか、そ れとも非理性の優位性を支持して、

ることが明らかになります。それゆえ、私たちは哲学に、また理性の優位性に基礎を置いた世界観に信頼を置くことができるのであり、その信頼は創造主である理性、すなわち神の愛に向かう信頼でもあるのです。

(最後に、ベネディクト十六世は、 代表の若者たちに聖書を手渡して、 次のように述べられました。)

り、真理はあなたたちを自由にす る。」(ヨハネ8,31-32)

(ベネディクト十六世は祝福を与えて、こう締めくくられました。)

今、この集いの終わりにあたって、 友なる皆さんに、私の敬愛する前任 者であるヨハネ・パウロ二世のことを 思い出していただきたいと思いま す。ヘブライ人への手紙についての 説教に従い、私たちもまた、神のこ とばを私たちに継げ知らせた方を思 い出し、その人生の最後に注目し、 その信仰の模範に倣いたいと望んで います。ですから、これから皆さん 方のうちの何人かが、ワールド・ユー ス・デーの最初に託された大聖年の十 字架と、サルス・ポプリ・ロマーニ (ローマ市民扶助者)の聖母のイコ ンとを持ってその墓を訪ねます。ど うか、私の巡礼と一致してくださる よう皆さんにお願いします。神様が ヨハネ・パウロ二世に、世界中に福音 を広めたその偉大な行いに報いてくださるように祈ります。また、教会の力によって、救いのみことばがあらゆる場所に広がり、地の果てにいる人まで届くために、私たちにもあの使徒としての熱意を与えてくださるように祈ります。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/wakamonotatino-shitsumon/(2025/12/12)